

# 浅場の抽水植物とトンボたち

かいぼりの際に行った浅場整備によって、ガマやヒメガマが生育するようになった井の頭池。こうした抽水植物の茂みはトンボ類のすみかでもあり、近年はトンボの生息状況にも変化が見られるようになった。



ヒメガマの葉先に止まるチョウトンボ



コフキトンボのオス(左)とメス(オビトシボ型)



図. ガマ類の茂みとかいぼりで整備した浅場 (■)

**水辺を彩るチョウトンボ**  
紫藍色の翅を輝かせてひらひらと舞うチョウトンボ。抽水植物などの水草が豊富な池沼に生息する美しいトンボだ。井の頭池では近年までとまどき飛来する珍しいトンボだったが、観察する機会が増えてきた。  
井の頭池でチョウトンボが増加した背景には、まず、かいぼりによって外来魚を駆除したことや水質が改善されたことがある。その上で、3回目のかいぼりの際に整備した浅場にガマ類が茂り、チョウトンボの生息に適した環境が広がった効果が大きい。2020年には、複数の個体を同時に観察できるようになり、2021年には目視数や確認地点が増加した。産卵も確認した。この傾向は2022年も同様で、井の頭池に定着したと考えられる。  
チョウトンボは、都内では生息環境の減少や外来生物による捕食の影響で減少し、東京都レッドリスト(多摩部)では絶滅危惧Ⅱ類に選定されている。こうした中、自然再生の取組によって本種の生息地がひとつ回復したのは、地域の生物多様性にとって価値のあることだ。

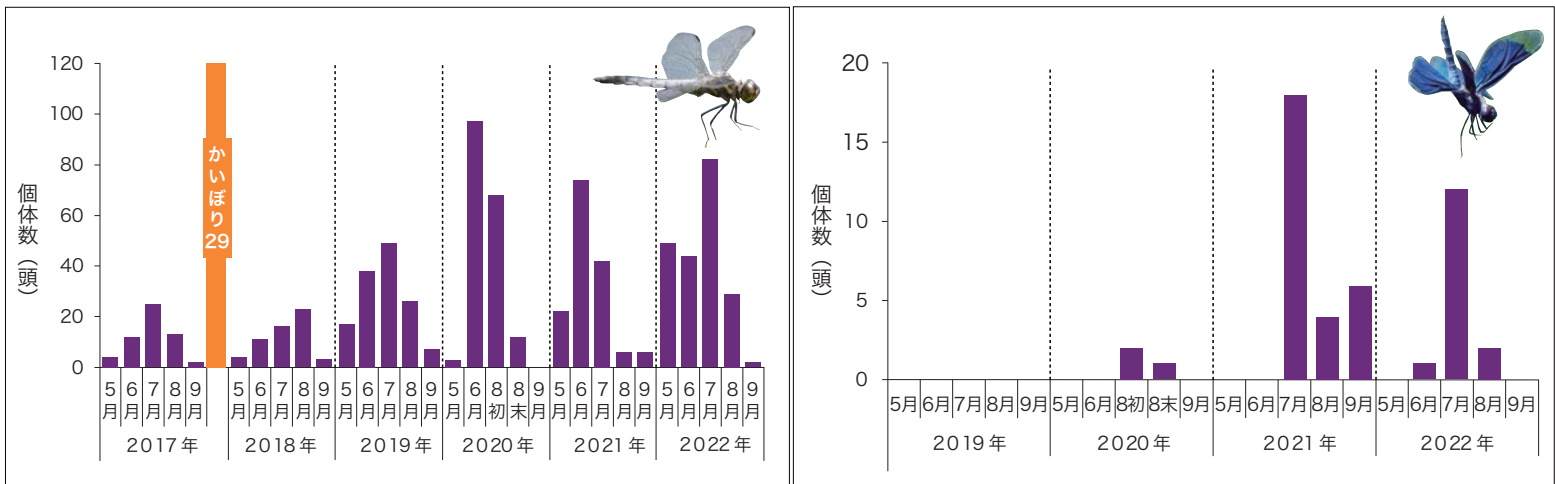


図. 調査で確認したトンボ成虫数の推移 (左: コフキトンボ 右: チョウトンボ)



ヒメガマの内部に産卵するアオイトトンボ

コフキトンボも増加

コフキトンボも抽水植物が繁茂する明るい池沼を好むトンボだ。井の頭池ではかいぼり以前から少数が生息していたが、それ以降、顕著に増加している。ガマ類の葉に多数のコフキトンボが並んでとまるのは井の頭池ならではの光景だ。本種のような普通種のトンボが当たり前に見られるようになったのはうれしいことである。

抽水植物に産卵、アオイトトンボ

青い目と緑色の体が美しいアオイトトンボ。都内では減少傾向にあり、東京都レッドリスト（本土部）では絶滅危惧Ⅱ類に選定されている。井の頭かいぼり隊によるモニタリングでは2021年に初めて見つかリ、産卵も確認した。アオイトトンボは、初夏から夏は林の中で過ごし、秋になると産卵のために水辺に戻ってくる。草の茎や葉の内部に卵を産み付ける生活史をもつ本種にとって、抽水植物は重要な役割を果たす。井の頭池が本種をはじめとする多様なトンボ類の生息地になるように、引き続き抽水植物の茂みを適切に管理していく。



コフキトンボ 5 連！

今号のイチオシ！ 自然情報



浅場に集まるギンブナ

10月以降、お茶の水池下流浅場にギンブナの若魚が集合していました。カワウからの捕食を逃れて浅場へ入って来たのでしょうか？ 人通りの少ないときには、アオサギが来てギンブナをねらう様子も見られました。

Topics

コカナダモの切れ藻回収

外来水草コカナダモは、2019年に生育が確認されると、2年後には池全体を覆うまでに急激に分布を拡大しました。コカナダモは初春から茎が伸長し、水面に到達すると茎が干切れて漂います。コカナダモは日本では雄株のみが侵入しているため種子をつくらず、切れ藻から発根して殖えていきます。井の頭かいぼり隊では、コカナダモのこれ以上の増殖を防ぐため、初夏から秋にかけて切れ藻の回収作業を行いました。

水面に広がっている切れ藻を、長さ10メートルほどの曳網で囲んで岸へ寄せ、陸へ運び上げます。毎回リヤカー5〜10数台分の切れ藻を回収しました。作業直後は水面が開けますが、2、3日経つと周囲から別の切れ藻が流れてきてまた水面を覆います。切れ藻回収をできるのは、毎週のアメリカザリガニ防除活動の後の1時間ほどなので、周辺一帯から切れ藻を一掃するまで、けっこうな日数を要しています。

切れ藻の発生が収束した10月上旬に作業は一区切りとなりましたが、回収できたのはあくまでも切れ藻のみ。水中にはコカナダモが生育したままでもまた翌春に伸長します。

根本的な解決策が必要ですが、大量の切れ藻が池底に堆積することや、切れ藻からの増殖を防ぐためにも、こうした作業を続けなければなりません。イノカシラフラスコモやツツイトモなどの在来水草の保全につなげていきたいと思えます。



曳網を使って岸へ寄せている様子



回収したコカナダモの切れ藻